



文琳茶入 銘玉垣 漢作 大名物

中国 南宋時代(13-14世紀) 高6.0 口径3.4 底径3.0(cm) 徳川将軍家伝来

◇◇ 館蔵品紹介 ◇◇

写真の作品「たまがきぶんりん玉垣文琳」は、茶道具の一つである「茶入」です。写真では大きく見えるかもしれませんが、高さがわずか6.0cmという、とても小さな壺です。加熱して発酵を止めた茶葉(碾茶)は、もっと大きな「茶壺」の中で熟成されます。お茶会の際、茶壺から取り出した茶葉が石臼で粉末にされた時、この小さな「茶入」に入れて席中に飾られるので

す。このため、古くは「こつぼ小壺」「すりちゃつぼ搗茶壺」などと呼ばれました。

室町時代から桃山時代にかけて、この茶入の価値は驚くほど高まりました。なぜこのような小さな壺が大切にされたのかというと、現在とは違い、日本の陶器が未発達な時代だったことが理由の一つです。茶入は本来、中国から輸入された、香辛料などの容器だったのでしょう。しかし当時の日本では上手く作れないほどの端整な壺は、粗末には扱われま

せんでした。そしてその中から、形や釉薬の様子が美しいものが選りすぐられると、象牙の蓋、錦の袋、さらには漆の盆が添えられ、名物道具として宝物化します。織田信長の武将、瀧川一益は、関東支配の要とされた厩橋城(群馬県前橋市)よりも、名物茶入「珠光小茄子」を欲しがったという伝説があります。一国一城以上の価値が認められる、それが唐物名物の茶入だったのです。

この「玉垣文琳」も、最高位の「大名物」に分類される作品です。千利休の活動した安土桃山時代の歴史史料である『天王寺屋会記』『山上宗二記』などに登場しており、当時からきわめて高く評価されていたことが判っています。「文琳」とは茶入の形の一つで、一説にはリング(林檎)に似ているから名付けられたともされます。「玉垣文琳」は特別に与えられた銘で、底面に見えている土が神社の朱塗りの垣根を思わせたことから、このように名づけられたそうです。

この「玉垣文琳」は来歴、つまり誰が所持したのかという歴史情報も豊富です。1530年頃の史料『清玩名物記』では、足利義政に仕えた同朋衆である能阿弥が所持したと記されます。その後、筒井という人物が所持したとあり、これは大和国(現在の奈良県)に勢力をもった戦国大名、筒井順慶かもしれません。さらに堺の豪商である祐長興太郎を経て、織田長益(有楽斎)の所有となりました。長益は、信長の実の弟であり、有楽流という茶道流派の祖とされる茶人です。慶長17年(1612)、豊臣秀頼が有楽の邸宅に訪問した際、長益から豊臣家へと献上されました。そして大坂夏の陣で大坂城が落城すると、「玉垣文琳」も蔵の崩壊に巻き込まれます。「玉垣文琳」は、一度ここで割れて欠片となってしまいました。

この大坂城の宝蔵に目を付けたのが、徳川家康の側近である本多正純でした。漆屋であった藤重藤元・藤巖の親子を焼け跡も生々しい大坂城へと派遣して、蔵の跡の灰ざらいを

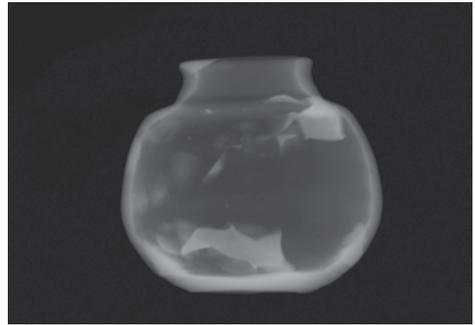
命じます。発掘された茶入の陶片は五つ分、藤重親子はこれを漆で仮継ぎし、京都で家康に披露しました。家康が喜んだため、藤重親子は二度目の調査へと向かい、さらに四つの茶入の陶片を発掘します。こうして合計九つの茶入が漆で修理され、家康へと献上されました。この内、「付藻茄子」「松本茄子」の2点は、褒美として藤重家に下賜されており、現在は静嘉堂文庫美術館の所蔵となっています。

残った茶入は七つ、これらは駿府(現在の静岡市)の家康の下にあり、家康の没後は紀州、尾張、水戸の御三家に分配されたようです。「玉垣文琳」は、紀州徳川家の初代・徳川頼宣のものとなりました。こうした家康ゆかりの宝物は「駿府御分物」と呼ばれ、江戸時代は特別待遇で扱われます。そして元禄14年(1701)、「玉垣文琳」は改めて五代将軍・徳川綱吉へと献上され、江戸城の蔵に入りました。この将軍家の所蔵品は、特別に「柳営御物」と呼ばれています。「玉垣文琳」は、「大名物」であり「駿府御分物」であり、さらに「柳営御物」であるという、三つの肩書を持っているわけです。こうして「玉垣文琳」は、昭和に至るまで将軍家に伝来します。昭和20年(1945)に美術史家であった團伊能が買い取り、その後遠山元一の所有となりました。遠山記念館の所蔵品となるまでには、これだけの物語があったのです。

ですが、いくつかの疑問が残ります。大坂城で灰ざらいをされた時、他の茶入と間違えられたかどうか、また修理された際にどれだけ元の形がのこされたのか、といった問題です。まず破損状況についてですが、実は「玉垣文琳」は、平成元年に解体修理されています。表面の漆が剥がれかけていたため、分解し、再び継ぎ直したのです。残されている分解時の写真からは、8つの大型の欠片と、14の小片の他、さらに小さな破片になっている姿が確認されます。これが大坂城落城に巻き込まれた痕跡です。同じように直された「付



分解された「玉垣文琳」



「玉垣文琳」のX線撮影

藻茄子」「松本茄子」は、X線写真から、もっと細かな破片に砕けていることがわかっています。特に口作りは粉碎してしまっていたため、他の茶入の破片を使って再現されました。この「付藻茄子」「松本茄子」に比べると、「玉垣文琳」はよく原形を留めていると言えます。口作りがほぼそのまま残されているのは、「挽家^{ひきや}」という木製の容器に取められた状態で、上から押しつぶされたためでしょう。これはまさに、不幸中の幸いでした。

またこの作品が、利休の時代に名物として扱われた「玉垣文琳」と一緒にどうかを特定する必要があります。一部の茶入には、名物記の絵図面や、「切り型」と呼ばれる原寸大の型紙も残されているのですが、「玉垣文琳」には残念ながらこれらがありません。このため、文献史料との照合という手段を用います。被災前の「玉垣文琳」について詳細に記しているのが、『宗及他会記』です。津田宗及は利休と同時代の堺の町衆であり、また茶人として織田信長、豊臣秀吉に仕えました。この宗及がいろんな茶会へいった記録をまとめたのが、『宗及他会記』です。特に宗及は、「玉垣文琳」と並び称された「珠光文琳(宗及文琳)」を所持していました。このため、祐長與太郎の茶会に招かれた際に、自分の持つ「珠光文琳」と、この「玉垣文琳」とを、詳細に比べています。

宗及は、「玉垣文琳」の特徴について、胴が下張りであること、口は根太であること、釉薬は天目のようで乱れていることを挙げてい

ます。実際に本作は、口元が下に向かって太くなる「根太」であり、胴も下方がふくらむ「下張り」です。さらに釉薬は黒く、確かに「乱れ」たように見えます。ひとまず、本作品の現在の状態と、高い整合性を持っていると言ってよさそうです。

また宗及は「比^{ころ}」、すなわち大きさについて、中より小形であると述べています。現在残されている他の名物文琳は、総高6.5cm以上の作品ばかりです。そんな中、6.0cmと小振りな本作は、天正年間に知られた名物「玉垣文琳」と合致しています。これは本作を大名物「玉垣文琳」と特定する、有力な証拠となります。

破損状況の中でも、特に重要な意味を持つのは、口作りが原形をとどめている点でした。古田織部は、文琳茶入の特徴は「ソギ口」にあると述べたそうです(「古織公伝書」)。先に挙げた『宗及他会記』においても、宗及は「玉垣文琳」の口作りについて、口の上の「そぎたる様なる」ところが、「珠光文琳」と同じであると記しています。このように詳細に見ているのは、この口作りが重要だったからでしょう。実際に「玉垣文琳」の口作りを見ると、厚めに轆轤挽きをし、削り出し整形を行っています。これが「ソギ口」の特徴になるようです。「珠光文琳」が所在不明であるため、この「玉垣文琳」こそが、文琳について考える上での基準作品と位置づけられるのです。

(依田徹)

今年の

干支に因んだ絵画 円山 応挙「黄初平図」

小野 恵

今頃の時期に‘干支に因んだ’と言えば、普通は来年の干支なのですが…当館所蔵の猿を描いた絵画の優品、森祖仙「猿猴図」については以前ご紹介しましたので、残り僅かではありますが、今年の干支に因み、羊が登場する作品、円山応挙「黄初平図」について少しお話ししてみましょう。

黄初平は中国・晋時代(265 - 420)に葛洪(283 - 343)が著した『神仙伝』巻二に登場する仙人の名。画面中央に描かれる黄兄弟の弟のほうです。丹溪(浙江省金華市)の人と伝えられます。

15歳のときに羊の番をしていたところ、ひとりの道士に見込まれて金華山の石室に連れて行かれたまま、羊の群れと一緒に40年以上消息不明となってしまいます。兄の初起は弟を捜し続け、あるとき市中で遇った道士に金華山にいる羊飼いのことを教えられます。兄弟はようやく再会を果たし、羊が見当たらないことを尋ねた兄に対して、初平は「羊よ、立て」と鞭を鳴らしてみせました。すると、辺りの白い石が悉く変じて数万頭の羊になったといいます。すっかり感心した初起は弟に就いて仙術を学び、こちらもやがて仙人になった、というお話です。

石を羊に変えることから、黄初平は富をもたらす縁起の良い仙人とされ、現在では中国を中心に「黄大仙」の名で多くの廟に祀られて信仰を集めているそうです。その上、音が「祥」に通じるところから吉祥と同一視される羊を題材にしていますので、この作品は大変縁起の良い一幅ということになります。

次はその羊についてです。兄弟の足元に羊がいます。少し小さい上に、‘あれ？山羊？’と思わず言ってしまうような羊ですね。現代の私たちが「羊」と聞いて思い浮かべる綿羊や食肉種とは随分違った姿ですが、羊と山羊は大雑把に言えば、同じウシ目ヤギ亜種の親戚です。品種改良を

重ねる前は、この様な姿の羊も多かったのでしょうか。江戸時代までの美術表現にみられる羊の大半は中国の十二支図などの絵画、或いは西洋の動物図鑑等を参考に描かれたものです。日本には元々、羊がいなかったからです。6世紀の終わり頃から11世紀にかけて、大陸の諸国から何度か羊が贈られているのですが、湿度の高すぎる日本で繁殖することはありませんでした。時代がずっと下って、江戸の後期には羊の飼育もされたようですので、その頃以降の画家は本物の羊をモデルに作画した可能性も高いと思われます。円山応挙は江戸中期に活躍した画家ですが、「群獣図屏風」(三の丸尚蔵館所蔵)でもポーズの違う写実的な4頭の羊を描いていますし、どこかで羊を実見する機会があったのではないのでしょうか。

右下の落款(サイン)「安永丁酉仲夏寫應挙」「應挙之印」(白文方印)「仲選」(白文方印)から、本図は応挙が数え年45歳のときの作品とわかります。岩石や人物の描写には形式的な狩野派の筆法が若干残るものの、写実的で穏やかな2頭の羊の表現に、応挙の作風をよく示しながら、不可思議な仙術の視覚化に成功しています。



さる
申と縁起物

1月8日(金)～1月31日(日)



申年にちなんだ絵画や、日本の松竹梅や鶴亀などの吉祥文の工芸品を取りそろえ、初春を寿ぐめでたい品々をご覧ください。

江戸時代後期に大坂で活躍した森祖仙の「猿猴図」双幅は、猿の柔らかい体毛の質感までも感じさせる描写がすばらしく、生きているような眼や、穏やかそうな顔の表情も、味わい深いものがあります。また、明治から大正時代の装飾彫刻家であった塚田秀鏡作の「猿」は、像高がわずか9cmの臘銀で造られた猿ですが、どうして好物の柿の実がついた枝を振り回しているのか？ 実際にご覧になれば、そのわけがわかります。

古代アンデスの猿の飾り取手がついた土器、インドネシアの猿を含む熱帯の動物園のようなろうけつ染布などもお楽しみください。



森 祖仙「猿猴図」

塚田 秀鏡作「猿」

ひな
「雛の世界」—日本人形之美と系譜— 2月6日(土)～3月13日(日)

江戸時代に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、雛人形を中心に江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどります。

高さが60cm以上もある大型で豪華な享保雛、丸顔で愛らしい次郎左衛門雛、江戸っ子に人気を博し、現代の雛人形のもととなった古今雛、高さが2～3cm程の「ミニチュア雛」、また久保佐四郎、永徳斎、大木平蔵など、名工と呼ばれる作家たちの雛人形などを展示致します。他にも嵯峨人形、御所人形、



享保雛

衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形、また郷土人形のコーナーでは、申年にちなみ、各地の猿を多数出品致します。併せて会期中、遠山邸の大広間では、十畳間の座敷いっぱいには飾られた雛壇飾りもご覧いただけます。これらは当館の創立者である遠山元一が、長女貞子の初節句の祝いとして、大正時代に揃えたものです。日本の人形が持つ魅力をご堪能下さい。



遠山家雛壇飾り



お香の会

2月7日(日) 午後1時30分～

徳川譜代大名 安藤対馬守家に伝わる香道 安藤家御家流による「お香の会」を開催致します。今回は普段公開していない2階数寄屋座敷で行います。お香は、お遊びの中に雅があります。

江戸大名家の奥向きで大きく花を咲かせた香道を体験しませんか。初心者も大歓迎です。

お香席：午後1時半～3時 受付：午後1時～ 場所：中棟2階座敷

参加費：3,000円(入館料は別途お支払いください) 募集人数：10名様

お問合わせ、お申込み：安藤家御家流百合会 板橋陽子氏

メール：yangzi_b@jcom.home.ne.jp 電話：090-7848-4298



「親子で楽しむワークショップ&ギャラリートーク 投扇興遊びと展示解説」



(共催 川島町教育委員会「地域子ども教室」)

2月13日(土) 午前10時～12時30分

せんすを投げて的にあてる「投扇興遊び」に挑戦してみませんか。また、その後は遠山邸に飾られたおひな様や「雛の世界」展を見学します。

申し込み方法：電話もしくはメールで、1月9日(土)より受付をします。

電話：049-297-0007

メール：arai@e-kinenkan.com

参加対象：小学生(入場無料)と保護者です。参加費不要。



ご当地グルメとコラボレーション!



「古今雛 遠山邸二階での特別展示と郷土料理 呉汁を楽しむ会」

2月20日(土) 午前11時30分～



担当学芸員による「雛の世界」展及び普段非公開の2階を含めた遠山邸の解説、ご案内の後、送迎バスにより、地元川島町の郷土料理「呉汁」を召し上がっていただく企画です。

また遠山邸の2階では「古今雛」(江戸時代後期 高70cm)を間近でご覧いただけます。(先着30名様まで)

参加費：2500円(入館料、飲食代込み)

申し込み方法：電話かメールで予約受付中。

電話：049-297-0007

メール：arai@e-kinenkan.com



かわじま呉汁

「雛祭りの日」ガイドツアー



2月26日(金)～2月28日(日) 3月1日(火)～3月3日(木)

午前11時30分・午後2時 (所要時間は約1時間半)

期間中の午前午後の2回、担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。



投扇興を楽しむ会

2月14日(日)・3月13日(日)午前11時・午後2時 (1日2回開催)

大観の桜・春草のつつじ -春を楽しむ- 3月19日(土)～5月8日(日)



横山大観の「八紘に耀く」や、菱田春草の「躑躅」など、春たけなわの日本画、木漆工の作品をお楽しみいただきます。

霊峰富士の耀きが周囲にあまねく広がる姿を、近景に満開の山桜を添えて描いたこの大観の絵に向かえば、日本の春をいっそう楽しく、いとおしく感じるのではないのでしょうか。また、春草の絵では

ピンクの躑躅と、淡い黄緑色の山容が対比された色彩の心地よさに、きつと癒やされます。

連休中の4月27日(水)～5月8日(日)の期間には、重要文化財である平安時代の仮名の名筆「寸松庵色紙」、岡田半江筆の長閑な春の山水図「春靄帰鴉図」を心ゆくまでお楽しみ下さい。



遠山邸の端午の節句飾り

4月13日(水)～5月13日(金)



邸宅・大広間でご覧いただく遠山家の端午の節句飾りは、鎧冑を中心に、鍾馗、応神天皇、加藤清正、金太郎など大正時代の五月人形の名品揃い。当主の遠山元一が、大正11年生まれの長男一行の初節句の祝いとして揃えたものです。旧家の伝統的な節句飾りは、最近ではめったに見ることができなくなりました。豪華な人形たちがお待ちしております。



手回し蓄音機によるSPレコード鑑賞会 Part 18

5月3日(日) 午後1:30～2:30 場所：本館大広間 先着50名様

和風建築の技術の粋を集めて昭和初期に建てられた、遠山邸の大広間で、今ではほとんど忘れ去られてしまったSPレコードの鑑賞会を行います。SPレコードは、エジソンが蝸管式のレコードを発明してから、大量生産に向く円盤型になって、音楽を記録する唯一のメディアとして一世を風靡しましたが、割れやすく、記録できる音域も時間も限られ、やがてLPレコードの出現によって姿を消しました。当時の名演奏家・名指揮者の演奏は、SPレコードでしか聴くことはできません。貴重な記録の中から、クラシック曲からはテノールのエンリコ・カルーソーなど伝説的な歌手の歌声や童謡・唱歌などを聴く予定です。電気を一切使わず再生されるノスタルジックな音をお楽しみください。なお、ご自宅に、SPレコードをお持ちの方は、当日お持ち頂ければ、飛び入り再生も受け付けます。



遠山記念館 新緑の茶会

5月14日(土)、15日(日)

1 席目10:00 (9:00に川越駅集合)、2 席目11:30 (10:30)、3 席目13:00 (12:00)

各席15名 ※たいへん申し訳ございませんが、この両日は一般のお客様はご入館できません

昨年は、三月の雛祭りに合わせてお茶会を開催し、ご好評をいただきました。本年は、茶道関係図書の刊行で知られる淡交社の主催により、二日間にわたり新緑の茶会を開催します。中棟の書院は遠山記念館が担当し、館の所蔵品を使った濃茶席を催します。この他に薄茶席、川越の有名料亭「割烹佐久間」による点心席がお楽しみいただけます。もう一つ、遠山記念館所蔵の茶道具をガラスケース越しではなく鑑賞できる展観席もご用意いたします。ご参加ご希望の方は、淡交社へお申込み下さい。

主催 (株)淡交社

濃茶席 遠山記念館

薄茶席 尾原宗弘

点心席 割烹佐久間

展観席

会費 お一人様 25,000円(税込)

お問い合わせ・お申込み

淡交社文化事業部(東京)

電話 03-5379-3227 まで



中棟書院の床の間



肩衝茶入 銘大嶋

染織にみる吉祥模様 -福を招くかたち- 5月18日(水)～6月26日(日)



宝尽模様布 日本(20世紀)

取り上げ、その模様に入れられた、祈り・招く・祝う表現の数々をお楽しみください。

【土曜講座】

題目：日本の染織にみる吉祥模様

日時：6月4日(土)午後1時30分

担当：水上嘉代子(当館学芸員)

スライドを交え、江戸時代の小袖などにみる吉祥模様をご紹介します。

私たちは、身につけるもの身のまわりのものを、装い・飾ることに余念がありません。小袖や調度品の模様には、動植物から山水風景など、多様なかたちが入り入れられています。なかでも吉祥模様は、よきことを喜び、めでたきことを求める、いつの代でも変わらない人々の一途な心から生まれたものでしょう。

長寿や平安を祈り、福を招き、寿ぎを祝うデザインは、さまざまなかたちに表現されてきました。そしてそれらを表現する加飾技法も、それぞれに味わい深いものです。

今回の展示は、日本・中国・インド・ヨーロッパなど、さまざまな技法で表現された吉祥模様を



ヘリコプターと人物模様布
ボルネオ島(20世紀)

「暮らしと建築の美－遠山邸研究会」の報告のご案内

平成27年度は、遠山邸研究会・セミナー講演会を2回開催いたしました。各回とも、お陰様で参加者も多数お出でくださり、盛況に終えることができました。素晴らしいお話をしてくださった先生方に、あらためてお礼を申し上げたいと思います。

第10回 講演会 5月23日

講師 庭師 小川 治兵衛氏 「植治の庭」

京都で代々庭作りを携わる植治11代目小川治兵衛氏にお出でいただきました。緑が少なくなってきた現代社会で、木や花を植えたい方に、自然の香りやエッセンスをお届けするのが造園の仕事ですとの話から、明治時代に京都の東山庭園群の庭造りをした7代目小川治兵衛の仕事、庭造りの心についてうかがうことができました。



第11回 講演会 11月7日

講師 文化財修復家 日塔 和彦氏

「日本の茅葺き・世界の茅葺き - 多様な茅葺き技術」

日本の文化である茅葺き建築を50棟余り文化財として修復の仕事をされてきた日塔和彦氏から、日本ばかりではなく、アジアや太平洋諸国、さらに今日も新築の盛んなヨーロッパの茅葺き建築についてお話をうかがいました。遠山邸の茅葺きは、南会津流の形状で、軒付けにもその影響があるをご教示をいただきました。



【これからの開催予定】

第12回 講演会 平成28年4月16日 土曜日 午後1時30分より

講師 建具師 高橋 利幸氏

題 「遠山邸の材料と建具の技法」

数々の文化財や名建築の修理をされている高橋利幸氏から、遠山邸に使われている檜、檜、杉、松などの木材と、建具製作の伝統技法についてお話をさせていただきます。門扉から、表玄関の舞良戸、座敷の襖やガラス戸など、頭を巡らせば、邸宅内で一番に眼に入るのが建具です。その奥深い魅力を再確認できると思います。ご期待下さい。

【申し込方法】

- ◆定員80名(先着順) ◆講座料300円、別に入館料700円が必要です
- ◆電話 049-297-0007か、メールで tikk@e-kinenkan.com 宛てに予約をお願いします
- ◆講演後(3時予定)に、遠山邸をご案内いたします



平成28年度

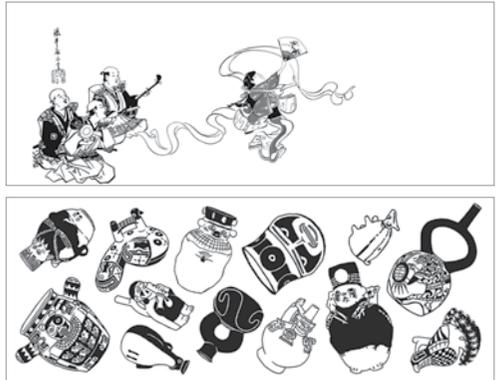
遠山邸2階の特別公開日のお知らせ

中棟2階の洋間の応接室と寝室、数寄屋座敷の公開は4月3日(日)、5月28日(土)、6月11日(土)、9月10日(土)、10月10日(月・祝)、11月5日(土)、午前11時から午後3時までになります。

オリジナル手ぬぐい発売

遠山記念館では、新しいミュージアムグッズとして、手ぬぐいを2種類販売しました。一つは重要文化財である「布晒舞図」。英一蝶の名作を、藍と赤の2色刷りの手ぬぐいに再現しました。もう一つは、遠山コレクションでも特色のある、「古代アンデスの土器」です。こちらは人気の手ぬぐいブランド「かまわぬ」に制作依頼し、個性的な土器をイラストタッチで散らしています。

両方ともに価格は税込1000円、当館受付で好評販売中です。来館の折々、ぜひお買い求め下さい。



遠山邸の解説案内

遠山邸が建てられた経緯や規模、連結する3棟の特色と座敷それぞれの意匠の違い、見所などを、1階を順に巡りながら解説いたします。毎週日曜日午後1時より

また、2005年からお願いしております解説ボランティアの秋山裕子さんに加え、2014年から梶野晴夫さんによるご案内もあります。ご案内日は基本として毎週火曜日と金曜日及び月3回の土曜日を予定しています。昭和初期にタイムスリップしたかのような空間で、銘木や職人たちの技をお楽しみください。

利用案内

入館料 一般 700円 学生 500円
中学生以下は無料

† 団体20名以上は2割引となります

交通

- 東武東上線・JR埼京線 ⇨ 川越駅
- 西武新宿線 ⇨ 本川越駅
- JR高崎線 ⇨ 桶川駅

川越駅～桶川駅間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

- 車の場合、圏央道川島ICより7分

開館 午前10:00～午後4:30 (入館は4:00まで)

休館 月曜日 (祝日の場合は開館、翌火曜日)
年末年始、2/2、3/15、4/12、5/14～17
美術館のみ展示替え休館
2/3～5、3/16～18、4/26、5/10～13、6/28～7/1

☎ 詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <http://www.e-kinenkan.com>



遠山記念館だより 第50号

2015年12月 発行

編集発行 公益財団法人遠山記念館
編集担当 久保木 彰一

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675

TEL 049-297-0007
FAX 049-297-6951